修士論文（要旨）
2015 年 1 月

大学生における就職活動の活発さと自己効力感およびソーシャルスキルとの関連について

指導　種市康太郎　准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
213J4003
一川亨

Master's Thesis（Abstract）
January 2015

The Association between Job Active, the Self-Efficacy and Social Skills of Undergraduate Students

Tohru Kazukawa
213J4003
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Kotaro Taneichi

目次

1. 問題と目的 1
2. 方法 1
3. 結果と考察 2
引用文献 I

1. 問題と目的

大学生の進路選択に関する研究において、最もよく検討される概念の 1 つに自己効力感（self-efficacy）がある。自己効力感は実際の就職活動の生起頻度との間に有意な正の関連性が示されている（e.g.浦上，1996a；太田ら，2012）。浦上（1996b）や種市（2011）は、実際に行った就職活動の頻度や開始時期の早さと、最終的な内定取得の有無との間に有意な正の関連を確認した。

一方、ソーシャルスキル（social skill）は、菊池（1998）によれば「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル（能力）」である。ソーシャルスキルと進路選択に対する自己効力感との間に有意な正の相関があることが確認されている（楠奥，2009）。ソーシャルスキルと実際に行われた就職活動、ならびにその結果との関連についての研究は見当たらないものの、ソーシャルスキルと実際の就職活動との間にも正の関連があると考えられる

以上から、自己効力感、ソーシャルスキル、就職活動の活発さおよび就職活動の満足度に関し、以下の 5 つの仮説を検討することを目的とする。1）就職活動の活発さとソーシャルスキルとの間には、有意な正の関連がある。2）就職活動の活発さと進路選択に対する自己効力感との間には、有意な正の関連がある。3）ソーシャルスキルと進路選択に対する自己効力感との間には、有意な正の関連がある。4）大学 3 年生において就職関連行動の 3 つの時期（思索開始時期、情報探索時期、活動開始時期）が早い者は遅い者と比較して、進路選択に対する自己効力感ならびにソーシャルスキルが有意に高い。5）大学 4 年生において就職関連行動の 3 つの時期が早い者は遅い者と比較して、進路選択に対する自己効力感ならびにソーシャルスキルが有意に高い。

2. 方法

首都圏の私立大学に通う大学 3, 4 年生を対象とし、質問紙調査を行った。322 部を配布し、188 部を回収（回収率 58.4%）、有効回答数は 157 部（有効回答率 83.5%）であった。分析対象者の内訳は、男性 48 人、女性 109 人、3 年生 114 人、4 年生 43 人（平均年齢 20.9 歳、SD＝0.94）であった。調査時期は 2014 年 7 月中旬と 2014 年 10 月中旬の 2 つの時期で行った。なお、それぞれの時期で調査に協力した学生は同一ではなく独立していた。

使用する質問紙は、①就職活動に関する時期（思索開始時期、情報探索時期、活動開始時期）、②内定の有無、③（内定者のみ）就職活動継続の意志と就職活動に対する満足度、④就職活動尺度（浦上，1996）、⑤ソーシャルスキル尺度（KiSS-18）（菊池，2007）、⑥進路選択に対する自己効力感尺度（浦上，1995）、⑦フェイスシートから構成された。調査は留置式で行った。

仮説 1 から仮説 3 を検討については、就職活動尺度、ソーシャルスキル尺度、進路選択に対する自己効力感尺度間の相関係数を算出し、関連を検討した。仮説 4、仮説 5 の検討については、就職関連行動の 3 つの時期に関して、それぞれ調査参加者の回答分布を元に、参加者を開始時期が「早い」「遅い」「まだ始めていない」の 3 群と、「早い」群と「遅い」群の 2 群に分け、3 群に分類した場合は分散分析を、2 群に分類した場合は t 検定を用いて尺度得点差を検討した。

3. 結果と考察

各尺度の尺度得点間の相関を検討するため、就職活動尺度、ソーシャルスキル尺度、進路選択に対する自己効力感尺度の尺度得点を算出し、相関係数を求めた（Table1）。その結果、就職活動尺度とソーシャルスキル、自己効力感の間で、正の相関が認められた。したがって、就職活動の頻度と対人スキルの高さ、自分の就職活動に対する自信の高さとの間に有意な正の関連があることが示唆された。特に、就職活動尺度の 2 つの下位尺度のいずれにおいても、「コミュニケーション」との間に、有意な正の関連が示されたことからは、就職活動の活発さと大学生が持っている他人に自分の考えや意見を伝えたり、自己を紹介したりする能力の高さとの間には、有意な正の関連があることが考えられた。北見（2010）は、コミュニケーション能力が高い者は、他者とのコミュニケーションを通じて、職業や就職に関する情報をより多く収集でき、自分の興味や考えを深めることが可能であるという考えを述べている。一方で、就職活動では集団面接や自己 PR など、自分の意見を求められる場面も多く、これらの活動を行うことで、結果として就職活動場面以外でのコミュニケーション能力が培われた可能性も考えられた。

各尺度得点の性差を t 検定により検討した結果、就職活動尺度の「自己と職業の理解・統合」のみ、女性は男性の尺度得点よりも有意に高い値を示した。北見ら（2009）は、大学生が就職活動を通して感じるストレスの調査において、女子大学生は男子大学生と比べて周囲に職業や就職の決定づけや、その後のキャリア形成モデルとなる人物の不足が精神的健康に悪影響を及ぼすと指摘している。本調査で調査対象となった女子大学生は、北見ら（2009）が指摘するように、男子大学生よりも周囲に自身の将来像を得るモデルが少ないために、より積極的に自己理解や将来像の統合を行う可能性が考えられた。実際に将来像を描くことへの困難さについて専用の尺度を用いて検討し、行動を起こす前段階において感じている困難さと実際の行動との関連を見る調査を行うことも、大学生の就職活動を促進あるいは抑制する要因を検討する上で重要な示唆をもたらすと思われた。

就職活動関連行動の 3 つの時期ごとの分析では、3 年生において、「情報を探し始めた時期」「活動を開始した時期」の 2 時期において、早く開始した者の方が遅く開始した者と比べて、就職活動尺度と進路選択に対する自己効力感尺度の得点が有意に高かった。このことから、就職活動を本格的に開始していない大学 3 年生においては、就職活動について考えるだけではなく、就職活動についての情報を探し始めたり、実際に就職活動を行い始めたりすることによって、自己理解が深まり、自分の就職活動に対する自信を強くもつようになることが考えられた。

大学 4 年生における就職活動の満足度と他尺度の得点、調査時期、内定の有無との関連を検討した結果、内定がある者はない者と比べて、就職活動の過程と結果に対する満足度が有意に高く、内定を得ていることと就職活動に対する満足度の高さとの間に有意な正の関連があることが示唆された。

本研究では、大学 4 年生から十分な数の回答を得られず、統計上の差を検討できなかった可能性があった。対象の学部をより広く設定することで、ある学部に特有の傾向や男女の偏りなどの影響も小さく出来ると考えられた。また、大学生が自分の就職活動のどの部分に満足を感じているかについても検討する必要であると考えられた。

Table1 就職活動尺度、ソーシャルスキル尺度、自己効力感尺度の尺度間相関と平均、*SD*

	自己と職業の理解・統合	就職活動の計画・実行	トラブルシューティング	マネジメント	コミュニケーション	平均	*SD*
就職活動尺度							
自己と職業の理解・統合	-					2.74	0.526
就職活動の計画・実行	.604 ***	-				2.22	0.756
ソーシャルスキル							
トラブルシューティング	.161 *	.189 *	-			3.15	0.697
マネジメント	.169 *	.066	.613 ***	-		3.32	0.657
コミュニケーション	.288 ***	.300 ***	.542 ***	.535 ***	-	3.04	0.769
自己効力感	.622 ***	.500 ***	.421 ***	.435 ***	.378 ***	2.64	0.432

*** $p < .001$　* $p < .05$

引用文献

菊池章夫(1988). 思いやりを科学する―向社会的行動の心理とスキル. 川島書店.

北見由奈・茂木俊彦・森和代(2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究―評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響―. 学校メンタルヘルス, **12**, 43-50.

北見由奈・森和代(2010). 大学生の就職活動ストレスおよび精神的健康とソーシャルスキルとの関連性の検討. ストレス科学研究, **25**, 37-45.

楠奥繁則(2009). 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究：KiSS-18 からのアプローチ. 対人社会心理学研究, **9**, 109-116.

太田さつき・田畑智章・岡村一成 (2012). 就職活動に対する自己効力感：大学生を対象とした尺度の有効性の検討. 応用心理学研究, **37**, 107-117.

種市康太郎(2011). 女子大学生の就職活動におけるソーシャルスキル、内定取得、心理的ストレスの関連について. 桜美林論考心理・教育学研究, **2**, 59-72.

浦上昌則(1996a). 女子短大生の職業選択過程についての研究―進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から―. 教育心理学研究, **44**, 195-203.

浦上昌則(1996b). 就職活動を通しての自己成長―女子短大生の場合―. 教育心理学研究, **44**, 400-409.